Member's Forum

会員投稿の頁

U35 talk baton

U-35委員会企画

talk baton 05 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

https://www.facebook.com/U35.aaj

talk baton 05

「建築と農業」

ゲスト

藤岡農園

代表 藤岡 良 氏

非農家出身者として有機栽培に取り組む一方、自身の人生設計の可能性を研究。農業の未来を思考する農家。

どんよりとした空模様が気になる中、京阪出町柳からバスで40分、京都・大原三千院のほど近くにある茅葺の民家を利用した「同志社大学農縁館」が座談会場だ。バスを降りると都会の喧騒は既になく、山あいの涼しさを感じつつ会場へ。今回は、農業の傍ら同志社大学大学院で研究活動をされる藤岡良さんをゲストに、お話を伺いに行った。

■ゼロからの就農

どのようにして農業を始めたのだろうか？まずはそのあたりからお話を伺った。

藤岡「もともと農業とは関わりのない人生でした。高校では部活に明け暮れて、普通に大学に入学して。就職活動ではエントリーシート書いて自己分析して自分を小さく飾って面接を受けるけれども、なかなか採用に至らなかった。その時、ゼミの先生から京丹後市の『ふるさと共援活動』に誘われたんです。」息抜きのつもりで参加した藤岡さんは、その時初めて田植えを体験し、泥に入った時の何とも言えない感触を清々しく感じたという。

藤岡「でも、一番感動したのは田舎のオヤジたちが何でも自分でやってしまう力強さでした。」簡単な大工仕事をはじめ、大豆を干したり川でウナギを獲って蒲焼きにしたりと、都会暮らしではおよそ自分ではやらないことをサラリとやってのける彼らを目の当たりにして、「何でもできる人になりたい」という衝動に駆られたという。

藤岡「ゼミの会食の席で先生に『農業って楽しいですね』と言ったんです。そしたら、その場で就農することに決まったんです（笑）」この瞬間から藤岡さんの人生は大きく変わっていく。実家が農家でもなく、農業経験もない普通の学生が、就職業種として農業を選択し、しかもいきなり独立農家として生計を立てていく。大学院では、自身を研究対象として「非農家出身学生の就農促進に関する実践的研究」というテーマで研究活動をしている。「自身が実験台となり、日本の農業を元気にしたい」と語る藤岡さんだが、就農したての頃はさぞ苦労も多かったはずだ。

■農家として生きる

恩師から言われた「農業だけで１千万稼げる」という誘い文句とは裏腹に、最初の半年はギリギリの生活だったという。

藤岡「雑草も想像を絶する高さに育つし、ある時畑に行くと、キュウリがカボチャの蔓に飲まれてしまっていて。当然収穫はほとんどできなかった。自然を御（ぎょ）せなかったんです。」藤岡さんには、就農時から農業の師匠がいる。当時も教わった通りにやっていたつもりだが、今思えば、農家としての仕事のリズムが身についていなかったと振り返る。そこで、師匠の所に行く頻度を増やし、農家の仕事の仕方や一日の過ごし方を徹底的に体に叩き込むことにした。２年目には師匠の得意品目である「ナス」を、自分も頑張ろうと決めた。なんとか納得のいくナスができ、早速まちの八百屋に売り込みに行った。「高いな、まあとりあえず置いてって。」市場ではどんなに高くても一本37円が相場のナスに、１本50円という値段をつけたせいか、反応は冷たいものだった。翌朝、八百屋から電話があった。「こんなうまいナスビ初めて食べた。ほんまに50円でいいのか？」その瞬間、農業を続けていけると感じたという。

農園耕地視察。ヒトの背丈より高いカボチャに仰天！

トゲのある巨大キュウリを収穫体験

本日の収穫物。カゴいっぱいの野菜です！

Member's Forum

会員投稿の頁

■野菜の価値をデザインする

スーパーで見かける価格には中間マージンが含まれるが、市場での野菜の単価はそれほど高価ではない。さらに自然相手の仕事であるがゆえ、丹精込めて作った作物を一晩の嵐で失うリスクを常に負っている。そんな条件下、農業で安定した生計を立てるため、藤岡さんが農作物にどのようにして付加価値を付けているのか伺った。

藤岡「生活者が自分で作ったものを食卓に並べることに意味があるんじゃないか、と。それでジャガイモのオーナー制度を企画しました。」一口3,000円で６株の種イモを購入してもらい、大原の畑で自分のジャガイモを作ってもらう。種イモ植えで１回、１カ月後の追肥・土寄せ作業で１回、最後に収穫で最低３回のプログラムを作り、支払いは振込ではなく現金手渡しにして、とりあえず畑に来てもらえるように工夫したという。

藤岡「２株からだいたい１kgのジャガイモが採れるので、１kg1,000円で売ったことになります。」ジャガイモは市場では１kg130円（！）くらいなので生産者の売値としては７～８倍の付加価値を付けたことになる。この発想は、生粋の農家ではない藤岡さんの経験と、市内から一番近い田舎という大原の立地条件が上手く噛み合っているようだ。その他にも、取引先のカフェとのコラボで体験農業や、子供を対象としたキッズファームを企画している。今年からは師匠が京都・太秦で行っていた農業塾を引き継ぎ、大学院の講義も兼ねて京都大原農業塾を運営している。

■コミュニケーションとしての農業

都会から田舎に移住したいと考える人が増えてきている一方で、ムラ社会の濃厚な人間関係や風習に挫折する人も少なくないと聞く。藤岡さんは実際に大原に移住してどう感じているのだろう。

藤岡「一門の先輩で初期に移住してきた人は同志社さんと呼ばれていたそうで（笑）」笑い話となった今でも、「入り人」に対するムラ社会の警戒心は少なからず感じるという。

藤岡「大原は市街地から近く、三千院など観光資源もあるので、他の地方に比べて強烈なムラ意識は少ないです。周りに迷惑をかけなければ自分のやり方を貫いてよし、という感覚がある地域だと思います。」田舎といっても千差万別。それぞれの地域で抱える問題も異なる。藤岡さんが初めて農業と出会った丹後は、都市部から離れ過疎化が著しいため、イベントを積極的に催し村に入って来てくれる人を募集している。

藤岡「でも人は選びたい、っていうのが本音。入ってきた人は追跡して見られていると思った方がいい。」入り人への警戒心と過疎化への危惧が交錯する。住人をフィルタリングしたいという発想は、前回の「建築と地元」でも登場した。田舎版エリアマネジメントがそこにある（参照：「建築と社会」2015.9月号）。

都市部では、取り壊される長屋や増え続ける空地にまちの衰弱化を感じ、疎遠化する人のつながりや地域活動に対する危機感が、「店舗」という場づくりの動機であったが、田舎ではどうだろう。

藤岡「田舎で田んぼが廃れると、村が廃れる。耕していない畑に草ぼうぼうだと人の心が萎える。人が離れて祭りもなくなり、ますます廃れていく。農村を復興するには農業を復興するのが一番なんじゃないか。」風景や風習などいわゆる「田舎らしい」ものの多くは農業を営む過程で生まれた副産物とも言える。田舎における農業は、地域の文化レベルのバロメーターなのかもしれない。

農のある暮らしに魅力を感じ田舎に移住したくても、移住者の住める場所は意外と少ない。土地や家など余っているように見えるが、実際にはオーナー不在で貸し借りできない状態のものも多いという。

藤岡「就農するには、収穫したものを洗ったり包装したり、出荷のための準備スペースが必要なんですが、そういう作業場のある住宅はさらに少なくて、新規就農者にとって大きな壁なんです。」他地域には２階建ての長屋形式のアパートに隣接して倉庫が併設した施設があるという。これは一種の「農業シェアハウス」と呼べるだろう。村人にとっては新規就農者が一堂に会しているので目が行き届きやすく、移住者はムラ社会との緩衝帯としてのコミュニティを形成できる。管理人が「師匠」となれば学びながら暮らせるし、場合によっては公民館や保育所を併設したり、トラクターなど耕作機器をシェアすることも考えられる。就農支援施設のデザインに、地域の抱える問題を盛り込んで建築計画に結実させることは、農を媒介として地元民と移住者の関係性をデザインすることに他ならない。建築のメソッドは、人々の暮らし方の変化に敏感であってこそ、社会的な意味を持ち得る。

■万能人への夢

都市に暮らす便利さは、本来、人間の持っていた生きる力を削ぎ落としていく。職業が乱立し、それまで自分で処理していた問題を、より専門的な能力や技術に対価を払って依頼する。

藤岡「しまいには何もできなくなるんじゃないかという危機感があって。将来的にはこの地で自給生活のプロフェッショナルスクールを開き、農業だけでなく狩猟技術も身につけて、一年中食っていける人間を育成したい（笑）」

自分の労働力を人に売る方が安定した収入が得られるが、自分が計画して一年生き抜いていく、というスタイルが楽しいという。一本のナスや万願寺に想いをかけたい、というのが今の目標だという。

藤岡「名刺代わりに野菜を出し、まずは食べてくれ、と言えるようになりたい。」野菜を愛する男は、意外にも根っからの肉食系だった。

talk baton 05 を終えて

農業を通して自己表現するという感覚が新鮮。都会以外の大部分の地域にとって農業と暮らしは切っても切れない。都会での暮らし方の多様性が議論される一方、都会人による田舎に対するノスタルジックな価値観を剥ぎ取った本質的で実用的な議論のステージが、農業にはあると感じた。

対　談　日：2015.07.04
場　　所：同志社大学　農縁館
（京都市左京区）
モデレーター：廣富　純（佐藤総合計画）

都会時間を忘れ、のんびり座談会。。。

「同志社大学農縁館」前で記念撮影